

# 学校を離れ、 多様な人に出会おう

岡崎ビジネスサポートセンター  
OKa-Bizセンター長  
秋元 祥治 氏



## 教育随想

中小事業者の売上アップにコミットする、中小企業や創業者向けの相談所「岡崎ビジネスサポートセンター」(OKa-Biz)の立ち上げから約六年。オカビズでは、これまでに二千社、一万二千件を超える経営相談をサポートさせていただいた。街のうどん屋や食堂、地場産業である墓石業や花火問屋、お米農家や趣味を生かしてスモールビジネスに挑戦する子育てママ……。もちろん自動車関連の町工場も多い。出合ったことのない業種や、仕事に合う日々。いや、一見同じ業種でも、一つとして同じ会社はない。それぞれの特徴や強み、こだわりや背景がある。毎日新しい出会いや発見の連続、これこそがこの仕事の醍醐味だ。これまで滋賀大学客員准教授や、早稲田大学招聘研究員などのお役目



令和元年10月1日

# 10月号

発行・編集  
岡崎市教育委員会

### 今月の紙面

- 教育随想…………… 1  
岡崎ビジネスサポートセンター  
OKa-Bizセンター長  
秋元 祥治 氏
- この人に聞く…………… 2  
長野県売木村役場職員  
重見 高好 氏
- 羅針盤…………… 2  
矢作北小学校  
校長 小嶋 利之
- ふれあい…………… 3  
河合中学校  
教諭 鈴木恵里子
- 特集…………… 4  
給食「食品ロス」と向き合う
- お知らせ…………… 6
- フォト・ヒストリー… 8  
新校舎完成(昭和61年)
- この本を…………… 8

も拝命してきた。その中で感じるのは、学生生活の中では職業や会社、そして、何より大人との出会いがないことだ。厚生労働省によれば職業は三万種、会社は三八〇万社以上ある。働き方も、キャリアの歩み方もすっかり多様化した。では、子供たちには、様々な仕事や大人の生き様に触れる機会はどれほどあるだろう。小学校から大学生まで見回しても、学校や塾の先生、バイト先以外には、よほど意図しなければなかなかその機会はない。キャリア教育やインターンシップの必要性が叫ばれ

て久しいが、我が子に、地域の子供たちに、そして先生方にも、色々な人や仕事との出会いがもつとあればよいのにと願う。  
大企業に入ることが絶対善でも、有名大学に進学することが勝ちでもない。仕事もヒトも多様だ。男性と女性と二つの性別で分かれるほど単純でもない。初等教育において基礎学力や人格の養成とともに、多様な出会いの中での「ゆらぎ」を通じて、それぞれ自分の幸せのものさしを見つめてもらいたいと切に願う。  
(あきもと しょうじ)



# この人に 聞く



## とことん走りたい

長野県売木村役場職員  
重見 高好 氏

「仕事と競技を両立しながら生活ができます。標高も高くて涼しいので、走るにはよいところですよ。」

そう語るのは、長野県売木村役場の職員、重見氏だ。彼は、公務員でありながら、ウルトラマラソンのトップランナーとして活躍している。ウルトラマラソンとは、フルマラソン以上の距離を走る過酷な競技である。重見氏は、二十四時間走では二百六十九・二二五キロの国内最高記録をもつ。

「毎日三十キロから四十キロくらい走ります。毎月千キロくらい走っています。走らないと何だか落ち着かないのです。」

屈託のない笑顔と明るさで場を和ます重見氏。岡崎の中学校で陸上と出会い、人一倍の努力を重ね、全国一位に輝いた。だが、その後のすべてが順風満帆に進んだわけでは

ない。

「実業団の大阪ガス陸上部にいたときは辛かったですね。なかなか思うように結果が出なくて、落ち込んで、吐くようになって。グラウンドに行くとも自然と涙が出るのです。精神的にきつかったですね。」

競技から退き、会社の社員として社業に専念するも、虚無感に苛まれる日々が続いた。

「自分は何をやってるのだろうって。走らないことが自分の望む生活ではなかった。そう思ったらまた走りたいっていう気持ちがかみ上げてきたのです。元々スタミナには自信がありました。ウルトラマラソンなら競技者として勝負できるチャンスがあると思ったのです。」

再起をかけ、高地トレーニングの合宿先として茶臼山を訪れた。その際、売木村にまで足を延ばした。大会で結果を出すと、村長から地域おこし協力隊員にならないかと打診を受けた。過疎の進む村もまた、重見氏と同じように再起をかけていた。

「やっぱり走ることが好きなのでしようね。今までずっと走ってきたから今の自分がいるので、走ることをおろそかにしたくないのです。走ることを取られてしまったら、生きる価値がない。私にとっては、走ることが自信につながっているのです。自分が走ることが誰かの役に立つのならと考え、協力隊の話を受けることにしました。」

売木村で重見氏が誘致するスポーツ合宿への参加者は、年間三千人を

超える。七年間、村の広告塔として売木村の看板を背負い、十分にその役割を全うしている。

走ることにどこまでも貪欲である重見氏。現在、舗装路以外の山野でフルマラソン以上の距離を走るウルトラトレイルに挑戦している。

「今度、ヨーロッパのウルトラトレイル・デュ・モンブランという、三千メートル級の山々を越える世界大会に出ます。燃え尽きるまで走りたいですね。」

走れる限り、重見氏はどこまでも走り続ける。最後に、岡崎の先生方にメッセージをくれた。

「走ることの楽しさを教えていただき、私を伸ばしてくださった中学時代の先生に本当に感謝しています。先生たちには、いつまでも夢をもち、何を目指しているかっていうのを明確にして、自分がしたいことをやってほしいですね。」

走ることにとことん向き合ってきた重見氏らしい言葉だと感じた。



氏名 しげみ たかよし  
生年月日 昭和五十七年六月八日  
住所 長野県下伊那郡売木村  
(岡崎市出身)



## 「問い」について考える

矢作北小学校  
校長 小嶋 利之

「今日の授業では、まだ、子供に問いが生まれていない。問いは、気づきとは違う」。そんな言葉に、授業をふり返る毎日だった。

主体的・対話的で深い学びの授業展開を考えると、軸となるのが、子供の問いである。理科では、自然現象に出合った子供たちの気づきを、追究を方向付ける問いへと高めていく。問いは、質問や課題ではない。問題解決の目的意識である。気づきが、追究に向かう意識や意欲にまで高まったとき、問いが生まれたと考える。そのため教師は、気づきを問いにまで高めるために、その子らしい気づきを見極め、価値づけることが大切である。

『花のつくりを調べよう』を課題に、子供たちの観察が始まる。Aは、ナ



## 自ら考えて、伝えるために

河合中学校  
教諭 鈴木恵里子

A男は、環境の変化や不安からか、中学校に入学して間もなく登校できなくなつた。しかし、当時の担任の粘り強い声掛けにより、少しずつ保健室に登校し、短い時間ではあるが学校で過ごせるようになった。

二年生になり、私が担任することになった。人前でほとんど声を出さないA男とコミュニケーションをとるため、私は、「はい」「いいえ」や、選択肢の中から番号で答えられる質問を心掛けた。初めの頃は必要なことを聞くだけだったが、だんだんと他愛のないことも聞くようになった。

「昨日ゲームしたの。」  
と聞くと、少し笑いながら頷く。

A男は、私が話しかける言葉を、いつも一生懸命聞いていた。A男の様子から、少しずつ私を受け入れてくれていると感じた。

保育園の頃から共に過ごしてきたクラスの生徒たちも、A男の様子から気持ちを感じ、

「A男君、用具を忘れたと思うよ。」  
「ダンスは見学するって。」

などと、代弁してくれた。皆、A男を温かく支えてくれた。

私は、A男と友達とが一緒に過ごす時間を増やすため、数人ずつ保健室で一緒に給食を食べるようにした。和気あいあいとした雰囲気になんか安心をもったのか、A男は笑顔を見せるようになった。

私は、三年生で再びA男を担当することになった。もう一歩成長を促したい。それには、A男が自己決定し、相手に思いを伝える経験を積むことが必要だと考え、A男に、ホワイトボードの利用を提案した。

「伝えたいことは、ここに書いて。」  
と言うと、A男は困った表情を見せ、身を固くしてしまった。そこで、まずは自分の行動を自分で決めさせようと考えた。翌週の時間割表を渡し、登校する時間や、参加したい授業を、自分で決めて、紙に書き込むのである。紙を渡すときには、「修学旅行の準備には、参加してほしいな」というように、私の願いも伝えた。

A男はじっくりと考えて、目標を書き込んだ。その週は、彼が決めた通りに行動することができた。

「ここまで頑張れて偉いよ。来週は、今週できたことに加えて、もう少し

参加できるといいね。」

と伝えると、A男は、自分で新たな目標を立て、紙に書くことができた。

そして六月、修学旅行に参加したA男は、皆とすべての活動を共にすることができた。

自分で目標を決め、それを伝える経験を通して自信をつけたのか、行事への参加の仕方なども自分で考え、決定できるようになってきた。

今、少しずつ学校で過ごす時間を増やしているA男だが、進路についても自己決定と表現をする機会を多く設け、A男の自信につなげていきたい。それが、彼が社会へ踏み出すための力になると信じている。



スの花が下向きに咲いていることに気づいた。この下向きに咲くところに、ナスの花の受粉の秘密がある。

「よい気づきをしている。これを、この子の問いへと高めてやりたい」と、教師の営みが始まる。Aの学びに向かう力を対話で価値付け、かわり合いの授業を仕組む。気づきを鮮明にして、問いを生むのである。

対話による価値付けで、Aは、ナスの花の観察にのめり込んでいく。

「ナスの花は、五角形の罎み<sup>くぼみ</sup>たいな形」「ナスだけだよ、雌しべが、雄しべより長いのは」。Aだけの気づきが出てくる。教師は、ここでも、かわり合いの授業を仕組む。他の花との比較で、ナスの花の特徴が鮮明になり、雄しべと雌しべの役割を知ったAに、「ナスの花が下向きに咲くのは、受粉と関係あるのか調べたい」と、問いが生まれるのである。問いをもったAの追究は、勢いをつけて主体的に進む。

教師は、その子ならではの問いを、その後の追究の礎として大切にしたい。子供たちに願いをかける。

問いをもった子供には、苦しい場面に直面したとき、そこを乗り越えていく強さがある。自己との厳しい対決の中で、自己を立て直していこうとする強さがある。それこそが、主体的に追究する子供の姿である。

# 給食「食品ロス」と向き合う



▲笑顔で給食「おいしいね」(竜美丘小)

「今日の給食のメニュー何かな。」  
給食の時間が待ち遠しい子供の姿、にぎやかな食事風景は、今も昔も変わらない。

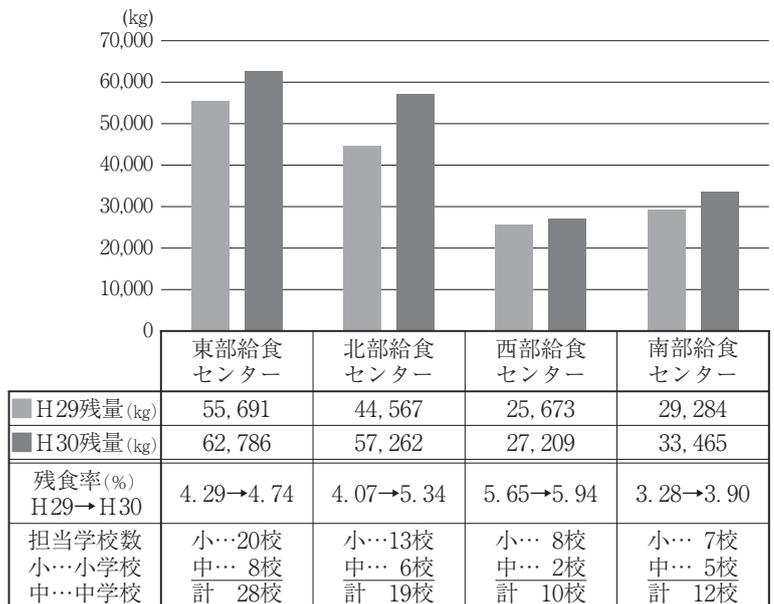
今年五月、「食品ロス削減推進法」が成立した。まだ食べられるのに捨てられてしまう食品を減らし、食品を活用する仕組み作りが日本全体で取り組んでいくことがねらいとされる。実際、日本では、年間六百四十三万トンの食品ロスがあるとされ、「学校給食における食品ロス」も課題である。

平成二十六年年度の環境省の調査では、小中学校の給食における食品ロスは六・九パーセント、一人あたり年間七・一キログラムにあたるという結果が出ている。岡崎市の給食センターにおいても、平成三十年度には総量百八十トン、五パーセント近くの残食が出ている。

かつて、欠席した子の家にパンを届けた記憶のある人もいるのではなかろうか。完食を目指し、かなり多く食べたことがあるかもしれない。しかし、今は衛生面や食育の面から、そういった指導はされなくなっている。

食品ロスという問題に、学校給食の現場から、どのように取り組んでいくべきか。食事を楽しみながら残食を減らすため、給食センターや学校において、様々な努力や工夫がなされている。

## 給食センター別・残量(kg)と残食率(%)の変化



### 《東部学校給食センターに勤める 大矢栄養教諭のお話》

センターに戻ってきた残菜から子供の味の好みや食べやすさなどを分析し、その結果をもとに献立を考えています。残食が多いからその献立をなくすのではなく、組み合わせや味付けを工夫して出すようにしています。

味覚の敏感な子供にとって、好き嫌いは仕方がないことです。でも、給食がその食事を好きになるきっかけになればいいと思います。先生方やお家の方には、子供たちに食べることの楽しさを伝えていただけたらと思います。一口でも食べられたら褒める、それを続けるうちに食べられるようになると思います。先生方には、ぜひお声掛けいただきますようお願いいたします。



「y eating」(六ツ美中) 団気を盛り上げ、給食の



の方と給食(岩津小) 時間に給食センターの調が来校し、調理道具などがら給食についての解説する。

# 給食・初めから終わりまでの流れと、食品ロスを減らす取り組み



## 検討

献立作成委員会は、市の職員、大学の先生、栄養教諭、給食主任、こども園や特別支援学校の給食担当、給食協会、保護者の17名で構成され、献立案について話し合っている。



## 調理

捨てる部分をできるだけ少なくする切り方や、子供が食べやすいようにスプーンに乗るサイズになる切り方をするなど、様々な工夫をしながら調理している。また、調理をする際に出たニンジンの皮やキャベツの外葉は希望する学校に飼育動物の餌として提供している。



## 処理

食品ロスを減らすため、各学校から集まった残食を計測してまとめる。その後、処理業者がパッカー車で運び、有料で廃棄される。



### ▲給食センター探検隊(東部学校給食センター)

子供たちが夏休みに給食センターを探検する。調理員の方の案内と説明で、実際に野菜を洗ったり調理用の大釜で調理の疑似体験をしたりする活動を通して、給食への関心を高めている。



### ▲完食レンジャー(福岡小)

校長、栄養教諭、給食補助員がお面をつけて「完食レンジャー」に変身。1年生の教室に現れて、バランスのよい食事を呼びかける。



▲学年交流給食「Enjoy」  
3学年一緒の食事で雰囲気を楽しむ。



### ▲給食センターの見学(美合小の校外学習)

実際に給食を作っている様子をセンター内の見学コースから見学できる。調理員が一生懸命に調理する様子を見て、給食を前より食べるようになる子もいるようだ。「多くの学校に、ぜひ見学に来てほしい」と、給食センター所長は言う。

## 給食

センターで

各校で



### ▲モリモリ給食タイム(井田小)

給食時間の校内放送で、6年生の代表児童が給食を食レポする。

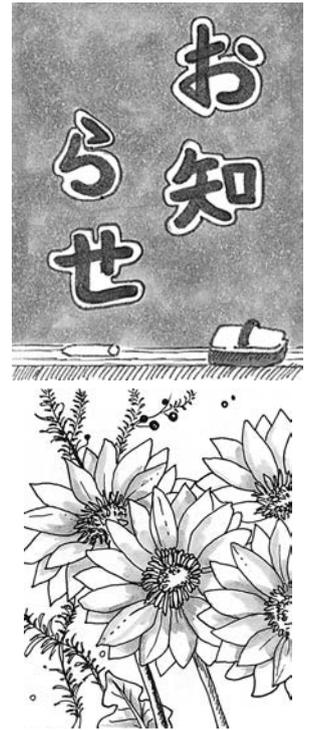


### ▲栄養教諭の授業(矢作東小)

給食の大切さ、食べ残しがどうかを学ぶ授業を行った。食事時間を確保しようと子供たちが協力して準備するようになった。



▲調理員 給食の調理員の方を見せなや交流を



### ●教育最新情報

○研究発表会・授業を語る会  
本年度は、iPadの活用

や、来賓制度の見直しをした  
ことで、これまでの研究発表

会とは様子が大きく変わる。  
授業力向上に役立てる学び

#### ◆岡崎市立上地小学校

十月三〇日(水)

※市委嘱 (H29/R1)  
「正しく・深く読む子を育て  
る国語科の授業」

「説明文・物語文の学習を通  
して」  
上地小学校では、「系統性

を重視した単元構想・計画」  
「学びを支えるノート指導」

「考えや思いを構築する授業  
展開」の三つの手だてを大切

にして、研究を進めてきた。  
子供は、学習課題に対しての

変わることを目指す。  
当日は、全学級で国語科の  
授業公開および授業を語る会

#### ◆岡崎市立岩津小学校

十一月六日(水)

※市委嘱 (H29/R1)  
「自ら考え、判断し、表現す  
る岩津っ子の育成

」『Iwazu Style』をまじに  
した授業づくり」

岩津小学校では「個の追究」  
と「かかわり合い」を段階的

に設定したIwazu Styleの授  
業を構築し、実践してきた。

共通の体験活動を足場に、個  
で思考し、「IWAズーム」

と名付けた本時の核心に迫る  
焦点化の場において、かかわ

り合い、考えを深め合っ  
ていく。  
当日は、子供たちが積極的

にかかわり合い、意思決定  
していく姿を引き出せるよ

#### ◆岡崎市立竜南中学校

十一月十三日(水)

「教科の見方・考え方を働か  
せた深い学びの構築」  
「竜南スタイルの授業構想を  
通して」  
竜南中学校では、学びの深

まりの鍵となるのは、各教科  
の特質に応じた「見方・考え

方」であると考えている。そ  
こで、新学習指導要領の方向

性でもある「主体的・対話的  
な活動」を取り入れる中で、

その見方・考え方を、授業で  
活用する場面を設定し、授業

を進めている。さらに、成果  
の確かめや問題意識の醸成が

できる「振り返り」の方法を  
工夫した。この「竜南スタイ

ル」の授業構想により、学び  
をつなげ、積み上げ、深める

ことができる。  
当日は、九教科の授業にお

いて、生徒が主体的・対話的  
に学習に取り組み、見

方・考え方を活用し、学びを  
深めていく姿を提案する。

「ふるさと宮崎で学び、新し  
い時代をたくましく生きぬく

子供の育成」  
「子供の語り合いを引き出  
し、深い学びにつなげる教師

支援の工夫」  
宮崎小学校では、自分の考

を広げたり、深めたりでき  
る。そのため、考えの根拠を  
明確にした児童のかかわり合

いを通して、互いに認め合  
い、自らの考えを深める教師

支援のあり方を研究して  
いる。  
当日は、全学級で授業を公

開し、授業を語る会を行う。

### ●表彰

#### ◆全国中学校体育大会

○柔道

・六〇kg級男子

五位 東海中 竹市 裕亮

○陸上競技

・男子四〇〇m

八位 東海中 小島 颯太

○水泳競技

・男子四〇〇mメドレーリレー

七位 甲山中 朝倉悠斗・加藤晴陽

・大原英登・加藤遼馬

○第41回東海中学校総合体育大会

○バスケットボール男子

二位 (全国大会出場) 葵中学校

○ソフトボール

三位 (全国大会出場) 甲山中学校

○卓球女子団体の部

三位 (全国大会出場) 新香山中学校

○柔道男子六〇kg級

優勝 東海中 竹市 裕亮

○陸上競技

・二年男子一五〇〇m

優勝 竜海中 杉田 晃大

・男子四〇〇m

優勝 東海中 小島 颯太

・女子八〇〇m

四位 竜海中 壁谷 裕奈

・三年女子一〇〇m

七位 〆美北中 小山 心結

・二年女子一〇〇m

七位 南中 藤井 鈴奈

・二位 城北中

二位 翔南中 林 美希

・女子一五〇〇m

七位 〆美北中 小嶋 聖来

・女子走高跳

八位 〆美北中 棧敷真菜美

○水泳競技

・男子四×一〇〇mメドレーリレー

優勝 (全国大会出場) 甲山中 朝倉悠斗・加藤晴陽

・大原英登・加藤遼馬

・四位 竜南中

相澤壮太・杉浦凜汰郎

・船越 洸・小林夢翔

・葵中

水野友翔・山崎倅太郎

倉橋駿斗・與五澤春希

・男子四×一〇〇mフリーリレー

優勝 (全国大会出場) 甲山中 朝倉悠斗・加藤晴陽

・大原英登・加藤遼馬

・八位 竜南中

小林夢翔・杉浦凜汰郎

船越 洸・相澤壮太



・カ  
ツ  
ト  
南  
中  
嶋  
田  
佑  
子

## 新校舎完成 (昭和61年)

写真提供：宮崎小学校

昭和六十一年、木々の緑に赤茶色のとんがり屋根が映える特色あるデザインの新校舎が完成した。

学区に岡崎森林組合(当時、額田町森林組合)があり、木材の産地である本校は、宮崎財産区の支援もあり、新校舎建築時には、地元宮崎の木を多く使用した。廊下や各教室には、ヒノキなどが使われ、校舎内に入ると、木造校舎のような温かい雰囲気を感じることができると。

現在、市内の小中学校でも、新築した校舎に地元額田産の木材を利用し、内装の木質化が施されている。地産地消の観点からも、木育の可能性からも、木のぬくもりを感じる学び舎づくりは、今後も多く求められていくであろう。



戸惑いながらも笑顔。今年も教育実習生がやってきた。教育書の通りにはいかなない学校現場。それでも、彼らの表情はいつも明るい。

教師を目指して懸命だった日々、初めて子供を前にしたときの高揚感。実習生の姿に当時の情熱を思い出す。

# ど ホ ツ

## 神無月



たくさん収穫できたよ(矢作北小)

伝えたいことが伝えられない、話したくても話せない子供がいる。その根底には、強い不安があるのかもしれない。

周りにできることは、寄り添い、認め、理解しようとする事である。温かい眼差しこそが、世界を変える第一歩である。



大教育者のことば  
偉人たちの残した金言名句99句  
井上久雄  
著

\*大教育者のことば  
致知出版社

井上 久雄  
¥1,600

### 心に残った一文

教育は菊づくりか大根づくりか。

『つらつらぶみ』は、短編ではあるが細井平洲先生の教育論がみごとに結実している名品と著者は語る。

私が私淑する大先輩の先生は、「今の若い教師は、斎藤喜博も東井義雄も知らなくてよく教師をやっているものだ」と嘆かれる。

時代は「令和」を迎え、矢継ぎ早に新しい教育が求められている。その成否を成すものは、日々子供たちを目の前にしている我々、教師一人一人の教育観であろう。古の偉人からその教育観を学ぶことの意義を、今だからこそ大切にしたい。

\*NASAより宇宙に近い町工場  
ディスカヴァー携書

植松 努  
¥1,000

\*修身教授録  
致知出版社

森 信三  
¥1,600

\*2020年からの教師問題  
ベスト新書

石川一郎  
¥800

大樹寺小 荒河 昌吾